

漢方医学

No.1

2005
Vol.29 No.1
Bimonthly

●巻頭対談

2005年 日本の医療と漢方

●新春インタビュー

漢方—これまでとこれから／欧米のKAMPO最新事情

●インタビュー/漢方を拓く

慢性頭痛に有効な釣藤散のラジカル消去能

●漢方診療外来

杏林大学医学部附属病院総合診療外来 漢方外来

- ケース・レポート
- 症例アブストラクト
- 漢方重要処方マニュアル
- 漢方随筆
- 方剤薬理シリーズ
- 処方名のいわれ
- 文献レビュー

欧米のKAMPPO最新事情

(慶應義塾大学医学部東洋医学講座 助教授)

渡辺 賢治

米国で増加する生薬利用

～米国の生薬使用事情からうかがいます。

渡辺 1990年に、ハーバード大学のアイゼンバーク氏(現在われわれと共同研究中)が全米の人々が代替医療をどの程度用いているかというインタビュー調査をしました。その利用率は実に33.8%であり受療頻度は通常のプライマリケア医に受診するよりも高頻度でした。93年の『New England Journal of Medicine』誌にこの結果が掲載されると、全米で一大センセーションを巻き起こし、代替医療が一気にブームとなりました。97年の再調査では利用率は42%とさらに増えており、212億ドルのお金が使われている実態が明らかになってきました。

～しかも教育程度の高い人々が多いようですね。

渡辺 教育レベルが高く経済的にも余裕のある階層が多く使っていました。これはおそらく日本でも同じような事情でしょう。

～その底流になにがありますか。

渡辺 直接的には西洋薬のさまざまな副作用問題があります。また、米国社会では保険が医療費を全部カバーしているわけではないため、セルフメディケーションの考え方が盛んです。政府も増えつつける医療費を削減したいため、ある程度容認していると思われま。また、新薬を開発していけば当然薬剤費は高くなります。また、移植医療や再生医療のような高度先進医療が発達すれば当然コストもかかります。さらに新しい抗癌剤が出れば医療費はますます高くなっていきます。医療費は上がることはあっても下がることはない状況にあります。

輸出できるのは漢方

～中医学や漢方はどの程度、認知されていますか。

渡辺 中医学はかなり認知されています。米国には中国系の方々も多く住んでおり、Traditional Chinese Medicine (TCM) はかなり認知度が高いですね。それに比べ漢方はほとんど知られていないのが現状です。

漢方は日本独自の伝統医学であり、TCMとは異なるものです。しかし、一般の市民までは認知されておらず、TCMと混同されています。このことは日本国内でも正確に認知されているとはいえません。国外はともかく、国内も漢方は日本のものという認識があまりありません。

～民間療法と漢方を混同している場合が多いですね。

渡辺 そうですね。例えば「漢方ツアー」と称して中国へ行き、漢方薬でも中医学でもない健康食品を買ってきて、漢方薬と混同している場合

などが見受けられます。

～国立代替医療センター(NCCAM: National Center for Complementary and Alternative Medicine)はその真贋を研究していますね。

渡辺 NIHはこれまで多くの資金をこの代替医療研究のために費やしてきました。NCCAMは現在、年間予算約130億円、NCI (National Cancer Institute) の予算を合わせて約250億円の予算です。しかし必ずしも順調に研究が進んでいるとはいえない状況にあります。例えば、前立腺癌の治療薬といわれるハーブの組み合わせがありました。これはホルモン剤などが混入されていました。また、ある生薬は、解析結果が出るたびに結果が違うのです。結局、同じロットのものは作れないことがわかり研究が頓挫しました。

そのような理由で、現在、NIHは品質の安定性に非常に神経質です。これがクリアできるのは、おそらく日本の漢方薬と一部の生薬製剤しかないと思います。あるデータが出てても再現性がないと意味がありません。漢方薬の場合は、30年近くの技術が蓄積していますから、品質は非常に高い。NIHならびにFDAはようやくこれに気がつき、日本に目を向け始めました。

現在、日本の医療現場は、米国に依存するものばかりです。心臓ペースメーカーは160～200万円しますが、ほとんど輸入です。またカテーテルや手術に用いる消耗品、インプラントの類はほとんど米国の医療機器メーカーの製品です。薬剤もしくりで、われわれは結局、米国にいくら支払っているだろうか、考えてみればみるほど極端な米国依存であることがわかります。医師の精神性も米国依存で、米国のものはすべて正しい、という風潮がみられます。しかし、日本にも素晴らしいものは数多くあるし、それに誇りを持つことが重要だと考えております。漢方はその一つであり、日本から米国に輸出できるという希望を持って活動をしているうちに、NIH International Planning Grant (R21) をいただいたという経緯です。

～ようやく漢方が少しずつ理解されてきたわけですね。

渡辺 現在は一部の海外有識者が漢方の存在に気がつき始めた段階です。これをどうやってスピードアップし国際化していくかというのが、私たちが今抱えている命題だと思います。その試みとしてバーチャルクラスをつくり、電子教科書で海外に教えていこうと考えています。具体的にはハーバード大学、ミネソタ大学、ハワイ大学とリンクする予定です。また、米国を中心とした若手の研究者に日本で勉強していただ

くようなフェローシップ・プログラムを慶應義塾大学で作っていただきました。

FDA: 桂枝茯苓丸の臨床試験

～現在、漢方薬がFDAの認可を受ける流れがあり、桂枝茯苓丸の臨床試験がスタートしたと聞いています。

渡辺 もう始まりました。漢方薬は日本では医療用ですから、フェーズⅡからスタートできます。ホットフラッシュに対するフェーズⅡスタディがミネソタ大学で始まりました。FDAのIND、つまり治験の認可を受けてミネソタ大学の倫理委員会を通して、さらに一部NIHのサポートを受けた施設で実施している研究です。

これはメーカー主導ではなく研究者主導の自主研究です。こういうことをやりたい医師は全米に数多くいます。慶應義塾大学東洋医学講座のホームページを見て、こんな研究をしたいというアクセスが多く寄せられています。今後、NIHの助成を受けた医師・研究者主導の臨床試験をどんどん進めたいと思います。

～ホルモン補充療法の問題点が指摘されて、桂枝茯苓丸はタイミングがよかったですね。

渡辺 180例予定のところ、始めの2日間に440通の治験応募の電話が殺到しました。ミネソタ州ではこの治験がニュース番組で取り上げられましたが、極めて異例のことです。いかに漢方に対する期待が大きいかという裏付けでしょう。

統合医療の実践

～漢方と西洋医学の統合という声も聞かれますね。

渡辺 一人の医師が西洋医学と漢方を同時に用いることができるのは日本だけです。例えば、私どもの大学でも、大建中湯と内視鏡手術を組み合わせる新しいコンビネーションセラピーを行っています。西洋と東洋の統合医学ができるのは日本だけです。ハーバード大学との共同研究(NIH; R21)もこういう観点から進めています。漢方薬と西洋薬との上手な組み合わせによって西洋薬の副作用を減らし、治療効果を高めることができると考えています。また医療費を削減するというのも重要な観点ですね。抗癌剤の副作用を漢方薬で軽減しさらに治療効果を高める、これは日本では当たり前に使われていますが、欧米では誰も知りません。日本は世界で最も優れた統合医学のモデルを実践していますので、これを日本から発信したいというのが私たちの願いです。

～基本的な診方の違いは、今後、どう教育されますか。

渡辺 現に私はミネソタ大学で講義しています



◆渡辺 賢治 先生
(わたなべ けんじ)
1984年慶應義塾大学医学部卒業。同年同内科。90年東海大学医学部免疫学。91年米国スタンフォード大学医学部遺伝学留学。95年北里研究所東洋医学総合研究所。2001年慶應義塾大学医学部東洋医学講座助教授。現在に至る。

し、うちの教室でも米国のレジデントやオーストラリアの医学生などが研修をしてきましたが、彼らはいろいろ疑問を抱きます。例えば腹診でどうして病気が分かるのか、冷え症はどうして治療の対象なのかなどさまざまです。しかし彼らは医学の基礎知識があるので、きちんと説明すれば納得してもらえます。漢方の診方は医療というコンテキストの中では特殊なものではないと思います。漢方の診方と西洋医学の診方を両方持つこと自体が診療の幅を広げると考えております。客観的データを重んじる西洋医学と主観を重んじる漢方の両方の目を持つことが臨床上、重要ではないでしょうか。どちらが優れているという議論は意味がありません。両方のいいところを取り入れてよりよい医療を提供する、これがポイントです。

～漢方を欧米に普及する時、課題はなんでしょう。

渡辺 中医学の普及は中国の国家政策です。それに比べて日本の場合は国の支援が全くありません。そのため効率が悪いことが挙げられます。また、漢方に関する日本語の論文を欧米にどう紹介していくか、日本の研究自体は優れていますので、なんとか海外の医師・研究者に紹介する術を見出すことが重要だと考えています。

～フランスやイギリス、ドイツではどうでしょう。

渡辺 イギリスでは非常に盛んです。Complementary medicineという言葉はイギリスから生まれました。フランスは昔から鍼が盛んです。ドイツは単味ですがハーブ療法が盛んで、私たちが太いパイプがありアプローチしやすいと思います。将来、EUが力をつけてくることが予想されますので、国際化にはEUも視野にいれるべきだと考えます。

～国内では、漢方の評価がもう一つと感ずます。

渡辺 確かに国内での評価はまだまだ低いです。日本の医学は米国の影響を受けやすいので、漢方が米国で認知されたら、日本国内での評価も変わると考えております。

～どうもありがとうございました。